発表タイトル	ベトナムの少数民族カトゥの文化変容の様態―トゥアティエン・フエ省ナムドン県における水牛供犠の踊りの分析を事例に―
発表者所属名	地域文化学専攻
発表者氏名	今井　彬暁

本発表では、ベトナムの 54 公定民族の一つであるカトゥの文化変容の様態を、トゥアティエン・フエ省ナムドン県における水牛供犠の踊りを事例として描き出す。具体的には、観光開発の影響によって踊りが演じられる文脈が変化した際に、文脈の変化に伴って踊りが変化した部分と変化していない部分とを明らかにすることで、カトゥにとっての踊りという文化的活動の変容の意味を考察する。

カトゥの社会では精霊信仰が精神的基底にあり、大きな祝いや災いの際に精霊に対して儀礼が捧げられる。儀礼には、農事暦の周期に対応して定期的に行われるものと、重大な局面に対応するため不定期に行われるものがある。本発表が照射する水牛供犠の儀礼は不定期に行われる儀礼の一つであり、グゥールと呼ばれる村落共同家屋の完成時など村にとっての特別の機会に行われるほか、かつては重病人の治癒にも用いられた。水牛供犠の儀礼では、まず水牛が村の中心にある供犠の柱に結ばれ、男性は柱と水牛の周りで銅鑼と太鼓を奏でながら踊り、女性は両手を天にかざしながらやはり水牛を取り囲むように輪になって踊る。踊りが終わると、男性は槍を用いて水牛を繰り返し突き刺して屠る。水牛供犠の儀礼は通常村全体で行われ、踊りは十数人から数十人の大人数で行われる。

水牛供犠の儀礼は現在でもナムドン県を含む多くのカトゥの居住地で行われているが、発表者が調査を行なったナムドン県のカトゥの村では、第二次インドシナ戦争期に災禍に巻き込まれ、戦後の社会主義的政策もうまく機能せず貧困に陥る中で、水牛供犠の儀礼をはじめとするかつての文化的活動が失われていた。こうした状況を受け、2003 年から同村では貧困削減と文化の再活性化を目的とした観光開発が省政府主導で進められ、開発の結果、民族織物や楽器、踊りといった幾つかの文化的要素は取り戻された。ただし、文化的活動は従来のままのかたちで再現され実施されているものばかりではない。例えば観光の文脈において踊られる水牛供犠の踊りは、水牛の供犠を伴わない形式で実施されており、従来の文脈や形式から離れて、観光客に披露しまた一緒に踊るといった観光客との交流のツールとしての役割を観光の場において付与されている。

このように、かつては精霊に捧げられていた水牛供犠の踊りは、上述の村の事例では、観光の文脈において文化的他者に向けて演じられる機会が現在の主流となっている。しかしながら、演じられる文脈は変化したものの、踊り手にとって、踊りは村内の社会関係を維持し再構築する機能を変わらず有していることが踊り手への聞き取り調査から明らかになった。すなわち、踊りによる村内の社会関係の維持、再構築という機能は、観光の文脈においても失われていない。カトゥの踊りは、観光化という新たな社会環境に適応するために変容しつつも、その社会的機能は形骸化することなく維持されている。